

—成果は〇、しかし、頭の痛いアトゥモロック・プロジェクト報告作業—

4月訪問時に持ち帰った領収書の整理をようやく終えました。前回ご紹介した泥だらけのレシートを一枚一枚、項目別に分けて集計してみました。種子や肥料、農業（コーンに病虫害が広がり当初予算に含めなかった農薬を購入）、農具など、組合員個人に配布された農業資材については、それぞれ10%の利子を加えられて克明に記録されていました。収穫が順調であれば年度内に、組合に返済される予定です。

経費には、「抵当に取られた土地の買い戻し」も含まれていました。アトゥモロックで住民が使用している土地は、国有地にある「先祖伝来の土地」で、所有権の売買はできないため、外部の人間に取られた土地は「抵当に入っている」状態です。これまでは種苗や肥料を買う資金のあてがなく、たとえ土地を取り戻しても無駄だったアトゥモロックの人々が、これらの農業資材貸与を含む本事業の実施で、できれば自分の土地を取り戻したいと考えるようになりました。平均1ヘクタール3000円ぐらいです。この経費も含めて、組合員は収穫があがってから組合に返済することになっています。

今年度はこの郵政省国際ボランティア貯金配分金事業の申請を見送りました。アトゥモロックの成果を見たうえで、次回申請に向けて時間をかけて準備をしたいと考えています。（事務局）

モンゴカヨも、初等教育は政府の手に —CMBの小学校・新任校長ノーマからのFAX通信より—

昨年度、政府が運営を放棄したモンゴカヨ（水もなく、町から隔絶された山頂の学校モンゴカヨに対して、公立小学校の教師は職場放棄？）は、住民の強い要望を受けてCMBが学校運営を引き継ぎ（校舎は政府のもの）、ベルミル、ブット、サグエの教師3人も配置されました（公立教師の資格を持たない3人の給与はCMBが負担）。しかし、資金不足で教師に十分な給与を払えないCMBは、政府と交渉を重ね、今年度は再び政府が運営することになりました。

モンゴカヨは昨年末にHANDS支援で簡易水道が完成し（「ビラーン通信」16号参照）、生活環境が改善されたので公立の先生も戻る気になったのでしょう。なお、住民の経済的自立などについては、今後とも周辺コミュニティーを含めてFr.ルーイが担当指導します。

一方、昨年度開校したラビルム分校は、教師達の指導に関わらず住民が協力的でないため（すべてが受け身で、生徒の出席率も50%以下だった）、一時閉鎖し、再び住民側から働きかけがあるのを待つことになりました。担当者Fr.ブランドの判断です。サランガニ州の州都アラベルに近く、意欲あるものは周辺の公立に通う手だてもあると見られるためです。

結果的に、今年度CMBがHANDSその他の協力で運営する学校は4校（生徒総数：350名、教師数：17名）となりました。政府（DECS）認可はラムアフスが決定、アトゥモロックは審査中です。

結果

—神聖な「ジャンディ」でキアミの伝統社会リーダーと協力関係確認—

キアミ・コミュニティーにたどり着くのは容易でないことは、これまでもお伝えしましたが、

このキアミで、4月の21～22日、CMBとコミュニティーの住民達が共通の目的に向かって進むことを証する、神聖な伝統的儀式「ジャンディ」が行われました。

CMDディレクターのFr.ポールは、キアミへの道の厳しさにふれて、「"ありがとうThank You"の言葉の価値を今回あらためて実感した。善なる神に感謝、がんばってくれた馬に感謝、助けてくれた住民に感謝、穏やかに流れてくれた川に感謝」

儀式はまず「ジャンディ」にふさわしい精霊の宿る地点を探ることから始まりました。そこでは、動物の血が精霊に奉げられ、それを互いに飲むことで信頼関係と契約が成立しました。具体的には、この儀式を通じて6ヘクタールの土地が長老達からCMBに委託されました。子どもたちのための学校を運営し、農業技術を教えるモデル農場、学校林育成などの土地です。すでに昨年、組合育成や学校運営（HANDSもカラバオ資金等協力）も始まっていますが、今回正式に契約が結ばれ、CMBとコミュニティー住民が協力して窮状の打開に当たることが確認されました。

川の増水で資材が運べず大幅に遅れていた教室の建て増し工事（笠井氏助成）も急ピッチで進められています。

（「GONG」No.2 および地域担当のFr. Brandoの報告より）